

一般社団法人 日本イエナプラン教育協会

ニュースレター Vol.31 2017.2月号

アクティブ・ラーニングのすすめ

日本イエナプラン教育協会
代表理事 久保礼子

「日本の子どもたちは、待っていますよね。先生が次にどんな良いものを出してくれるか、いつ正しい答えを教えてくれるかと待っています。」「子どもをアクティブな状態に置くことはとても大切なことです。子どもは受身の状態に置かれたままでは、消費者に、しかも無批判な消費者にしか育ちません。」

これは、2008年に私がオランダイエナプラン校に1週間滞在させていただいたときに、その学校のリーン校長先生と、イエナプラン教育専門家のフレイク講師から言わされた言葉です。大変衝撃を受けたことを今でも覚えています。そしてその後ずっと、私の心に深く残っている言葉です。

2020年からの新学習指導要領実施に向けて、今多くの学校現場で関心を集めているのが「アクティブ・ラーニング」です。10年前に、オランダで日本の教育に絶対に必要なことだと確信したことが、今学習指導要領で重要視され、全国の学校現場で行われようとしています。このチャンスを生かすべく、アクティブに学ぶということの本質を、イエナプランを通して考えてみたいと思います。





私とオランダイエナプラン

2008年当時、私は中学校の社会科教師をしていました。分かりやすい授業を目指し、経験25年を超えてそれなりに評価も得て、充実した楽しい日々でもありました。でも一方で、生徒自身に一体どれだけの力をつけているのだろう？

もしや一番頑張って楽しんでいるのは自分ではないか？

私の頑張りは心地よさの提供で終わっているのではないか？といった漠然とした疑問を感じる日々でもあったのです。教えることばかりを考えてきた私が、学ぶということの意味をやっと生徒の側から考えだした頃だったのだと思います。

リヒテルズさんの著書と出会ったのが丁度その頃。生徒が主体的に学ぶ学校の様子がそこに書かれていました。異年齢、リビングルームのような教室、4つの活動によるリズミカルな時間割、どれも子どもの自然な学びを生み出すことを意図した理想的な学校環境に思いました。読むだけではどうしても分からず、是非その教室に身を置いてみたいと思うようになり、「自己啓発のための休職」という制度を使って大学の修士課程に籍を置き、オランダのイエナプラン校を訪問する機会を得たのです。教育の本質に関わる様々なことを考えさせられて、かなり混乱した状態で帰国したように思います。日本とオランダでは余りに違いすぎるという無力感も感じたし、いや出来ることもいっぱいある、出来ることを一つ一つしていくべきだとも考えました。そうした中で、「子どもをアクティブな状態に置く」というフレーズは、授業づくり、学級運営、学校運営を通して、その後の私の実践の重要な柱となりました。

「アクティブな学び」とは受身ではなく主体的に学ぶということですね。しかし、「子どもの主体的な学び」なんてことは、戦後ずっと日本の学校の多くが目指してきたことに違いありません。おそらくどこの学校目標にも通じるキーワードの一つだと思います。私自身、教師になってずっと目指してきたことです。目標には掲げるけれど遠い理想として棚上げされている、それが日本における子どもの主体性なのかもしれません。

だから、オランダで見た、実際に子どもが主体である学校の様子は、私には驚きの連続でしたし、「子どもをアクティブな状態に置かないと、消費者にしか育たない」というフレーズは、もはや理想として棚上げすることではないという衝撃の指摘だったのです。





子どもをアクティヴな状態に置くとは

では、オランダイエナプランの子どもは、どうアクティヴなのでしょうか。子どもをアクティヴな状態に置くとはどういう実践に見ることができるのでしょうか。

自分で考えて動く

イエナプランの学校にはチャイムはありません。また、先生が前に立って指示をしたり号令をかけたりするシーンもほとんどありません。子どもたちは教室の黒板の隅に、メモ程度にかかれた時間の指示と、時計を見て自分たちで動きます。

学習は、教師が一斉指導をする形ではなく、基本、子どもたちの自主学習の形で行われます。その日の課題に、教科書を横に置いて自分で取り組んでいきます。席を立つのは自由です。パソコンで調べたり、先生や友だちに質問に行ったり、友だちと一緒に何かをするために良い場所に移動したり、自分に合う教材を棚から選んで持ってきたりしながら学びます。教室の造りそのものが、子どもが自分で学ぶことを考えて設計されています。いつも誰かが自由に動いている、けれど教室はとても静かです。それぞれ次々にすることがある様子で、学習時間はとても忙しそうです。低学年の子どもたちですら、何をしてよいか分からずボーッとしている場面がないのです。



今日何を学ぶのか、自分はどこができるいて、どこができるていないのかが、本人によく分かっていて、与えられた時間の中で何をどう進めていくかの計画が、子どもたち自身の中にあるのです。計画が自分たちの中にあるから、教師が指示、号令しなくとも自分たちで動くのです。学校の時間割によって動かされているのではなく、その日自分が学ぶべきことによって動いているのです。

選び、実行、責任を持つ

一クラスには30人ほどの子どもがいます。本当にこんなに誰もが自分の計画で動くことなんて出来るものだろうか、ここにいるのは特別な優秀な子どもなのではないかとさえ思いました。しかし、目の前にいるのはごく普通の子どもたちだということ。ブロックアワーの時間があり、1週間の計画表を持ち、何をどの順番でどのようにしていくかを自分で選択し、実行していくという日々の積み重ねの中で、少しずつ自分で学習を進めていく力をつけていっているのです。同時に自分の学びに対して責任を持つことも学んでいると担任の先生はおっしゃっていました。

まねて動く、学ぶ

よく観察していると、異年齢集団であることがとても有益であることが分かります。新学期に一斉に新しい30人の子どもと新しいクラスをスタートさせるとしたら、きっと先生の指示や支援がたくさん必要になるでしょう。慣れるまでに時間もかかるでしょう。ところが異年齢学級では、新学期にそのクラスに入ってくるのは3分の1の10人程。その子たちは、そのクラスのルールややり方を十分理解している年上の子を見て、まねて、学んでいくのです。不必要に教師の指示が増えることがないのです。「子どもたち自身で何でもどんどんやりますよ」と担任の先生は話して下さいました。

自信・安心を育む

イエナプラン校の子どもたちは、学習の方法や遊びの内容を寸時に選択して、すぐにそれに集中します。私ならもっと迷うなあ、とその姿に感心してしまいます。なかなか選べなくて迷っている子どもを、4~6歳のクラスでは何人か見かけました。担任の先生はその子と会話しながら、選ぶことを手伝います。手伝ってもらいながらも、選び実行して、自信をつけるという経験を重ねて出来るようになるのです。

この自分で選ぶという活動、ある程度自信がないとできないことだと思いますか？自分で選んだことに集中することも、そう簡単なことではないと思えます。飽きたり、人の物が良いように思えたり、つまんなかったなと後悔したりもしますよね。「自分で選択し、集中する」という行為は、自分を良しと認めることや、自分を知っていること、自分に責任を持てるここと、など自尊感情と大きく関係しています。さらに他の子どもとの関係性も絡んできます。自分が選択して行っていることが、邪魔されたり否定されたりしないという安心感、誰と遊ぶことになっても一緒にやれるという信頼感、こうしたものが背景にあるからこそ、自分で選び集中することが、簡単に繰り返し行われるのです。

こうした自尊感情や安心な関係づくりに大きな働きをしているのが、サークル対話や催しの時間です。サークル対話では、話し手が心地良いこと、つまり周りがじっくり聞くことを大切にします。自分が体験したこと、考えたこと、感じたことをゆっくり話し、それを周りがしっかり受け入れてくれる——どんなに温かい気持ちになれるでしょう。このサークル対話での体験が自己肯定感の根底を培っているといつても過言ではないでしょう。また聞き手は、相手を受け入れた上で、自分の意見や考えを伝えることをします。相手との違いを知り、自分の考えをきちんと持ち、相手に伝えるという、他者との関係性を育む練習を、サークル対話を通じて日々行っているのです。

私が訪問した学校では、週に1回、全校生徒が集まる催しが行われていました。毎週催しを行うので、さぞ教師の負担が大きいのでは？と考えてしまいますが、これも主体は子どもです。



何をどのように発表するか子どもたちが決めて準備します。もちろん先生もアドバイスはしているでしょうが、日本の学校でありがちな、完成度を高めようと教師が必死に指導したり、残業して発表用の道具を作ったりしているシーンはまったく見られませんでした。重要なのは、子どもたちが、自分たちが学んだことを全校生徒や保護者に見てもらうことそのもので、学びを共感し合うことにあるのです。催しの後は、感想を伝え合い、発表をした仲間の頑張りを讃えます。自分が仲間として受け入れられている安心感や自尊感情がここでも十分育てられるのです。

何でも子どもに任せていれば子どもはアクティヴでいられるか、そうではありません。子どもが、自らこれをしたい！こんな風にしたい！とアクティヴに考えることができるのは、自分と仲間を信頼する土壌があるからなのです。イエナプラン教育では、それらを育む機会を、意図的に、学校生活全体に取り入れているのです。

● 探求と協働の学び — ワールドオリエンテーション

自主学習を中心に行うブロックアワーに加え、イエナプラン教育が学びの中心に据えているのがワールドオリエンテーションの時間です。年間7つの学校共通テーマが設定されていて、それについて、子ども自身が持つ問い合わせからスタートして、探求をし、まとめ、プレゼンをしていきます。グループでの協働学習の形を多く取り、自分たちで考え、調べ、コミュニケーションを取り、さまざまな形で発表します。これはまさしく、文科省がいうところの「アクティヴ・ラーニング」 = 「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」です。イエナプラン教育でも、このワールドオリエンテーションは子どもがアクティヴに学ぶ重要な時間で、イエナプラン教育の心臓と位置づけています。それは、ブロックアワーでの基礎学習、サークルでのお互いを承認し合う経験、遊び、催しでの創造と協働の経験がうまく合わさり、ワールドオリエンテーションでの深い学びにつながっていく、つまり4つの活動の集結がワールドオリエンテーションとなり、逆にワールドオリエンテーションの学びが4つの活動の意味をより深くするという、学びのサイクルがあるからです。



アクティヴに学ぶことの本質は？

「子どもをアクティヴな状態に置く」という視点から、イエナプラン教育の特徴を見てきました。教室の造り、ブロックアワー、異年齢、サークル対話、催し、遊び、これらのことすべて子どもの自然な学びを意図しており、相乗作用をしていることが分かります。

単発でアクティブな活動を入れているのではないのです。また、ただアクティブにさせているのでもありません。

オランダで大切だと指摘されたのはアクティブな「状態に置くこと」であって、アクティブに「させること」ではありませんでした。これらはどう違うのでしょうか。教師という役は、どうしても熱心に子どもを導きたくなり、その結果つい自分が主体になる傾向、つい「させる」発想で子どもを見てしまう傾向にあります。でもそれでは、活動を授業の中にたくさん取り入れ、子どもたちが活発に動き、発言したとしても、もしかしたら子どもの頭や心はアクティブではなく、させられていることをしているだけかもしれません。反対に、じっと座って、じっと本を読んだり、じっと人の話を聞いているとしても、子どもの頭や心はとてもアクティブに動いていることもあるかもしれません。「状態に置く」という発想は、そこでの子どもの行動よりも、内面のラーニングを見ていることの現れだと思います。私たちは、行動面だけに囚われて簡単に「させる」発想にならないように、肝心のラーニングがおざなりにならないように、気をつけなければいけません。アクティブ・ラーニングに危惧を持っておられる方々が「本当の学びになるのか」と感じている、このことはとても大切なポイントなのです。もちろん、従来の授業スタイルにとっても同じくです。「本当の学び」となるように、子どもたちが「アクティブである」ことを進めるのが、アクティブ・ラーニングの本質なのではないでしょうか。

私は、子どもがアクティブであるためには、子ども自身が、自分が主体であるということを自覚できていることが必要だと思っています。「これは自分の問題だ」「自分の学びだ」と。しかし、「何のために勉強をするのか」をとりあえず横に置いて、自分の興味関心を問うよりも、正解のある問題の点数を上げる勉強が中心の状態では、学びの主体が自分であることを自覚するのは難しいです。そこでは、教師が、正解や効率の良さ、分かりやすさを提供してくれる存在としてあり、人より良い点数を取ることが自分の評価で、他者との比較が重要な物差しであって、皆が行く塾に行かなければ不安にもなるし、点数が悪ければ、教え方が悪いと責任を他に持つて行くか、こんな自分はもうダメだと思ってしまう。一体何のために、誰のために勉強しているのか分からなくなってしまいます。

学校がもっと時間を子どもに預けていて、好きなこと、苦手なこと、得意なこと、不得意なこと、色々なことに取り組み、成功や失敗をたくさん体験して自分自身を知る場所となれば、学びの主体が自分であることを自覚出来るのではないか、そう考えます。大人が子どもを学びの主体として認め信頼している、このことが、子どもたちが「アクティブである」ためには必要なのです。





「子どもをアクティブな状態に置く」ことを意識して

現場に戻っての私の実践を、少し振り返ってみたいと思います。

授業づくりでは、「何をどう教えるか」で考えていた構成が「何をどんな活動を通して学ばせるか」の構成に変わりました。説明していた内容を、子どもが気づく、分かる、説明する、話し合う、等の視点から見直していくと、単元全体を通して最も重要なことは何かを、私自身が考えることにつながります。これまでも子どもに考えさせる授業をしてきたつもりだったけれど、知識量と話術で押し切ってきた部分が何と多かったことか。内容について勉強することで整えていた授業準備が、その次の、それを子どもたちとどうするのかを考える準備へと、教材研究のあり方が変わったのです。また、ちょっとしたゲームや、グループでの話し合いや、生徒が全体に説明する活動などが増えていきました。私はゲームを仕切ったりすることは苦手です。でも、クラスを良い雰囲気にするためには、ちょっと遊びの要素を入れることは効果的。少しずつ挑戦し、その日の題材に関連した内容を織り込むなど自分でアレンジしていくと、ゲームも案外安心して取り入れることが出来るようになります。無理だろうと思っていたサークル対話も、生徒たちには私が思っていた程大きなハードルではなかったことは驚きました。みんなの顔が見える、余り発言しない人も発言しやすくて良いという生徒の反応です。お互いから学ぶことは楽しい、当たり前のことを生徒は求めているのですね。丸くなることで視線が一箇所に集まります。絵や写真をそこに置いて意見交換することや、その場を使ったゲームをするなど、導入段階ではとても有効でした。

子どもたちは自分たちの出番が来るのを求めています。教師自身が、これは無理だ、こうあるべきだと、自分を縛ってしまっていることが実に多いことを思われます。

総合学習についても触れたいと思います。一年間で3つのテーマを設け、学年全体で生徒が主体的に関わる探求型の学習を目指して取り組みました。それぞれ充実した取り組みになりました。しかし、単発に終わった、という反省が残ります。今考えるに、担当者（私）が頑張った取り組みだったと思えます。担当者が一生懸命考え、計画し、誰でもが取り組める形に整え、学年会に提案する。他の教師は安心して計画に従い協力する。その取り組みはうまくいく。それでおしまい。また次の提案を待つといった具合です。生徒にとっても、それぞれ楽しいイベントで終わったのではないかという反省なのです。各担当が綿密な計画を立てて提案していくやり方は主流です。運営委員会を経て職員会議に下ろされたものに、あれこれ言うことは良くないという不文律さえあります。そのおかげで、多くの煩雑な学校行事がスムースに行われていくのです。大きな学校では、教師自身ベルトコンベアに乗っているかのようです。もちろん会議を効率的に進めることは大事なことです。でもその本質に関わる部分、この活動は何のためか、この活動を通してどんな学びを子どもたちがするのか、そのために教師たちはどんな立場でどんな支援をするかなど、そのあり方に関してじっくり話し、共通了解を持つ、その時間を持つことはとても重要なことなのだと、今思っています。

「完璧に」と一人で頑張らず、もっとあり方を共有することができていれば、内容ももっと深まっただろうし、色々な教科との横断的な学習にも発展しただろうし、学校生活全体にもつながっていけたかもしれないし、次の年度にも続いていっただろうと思います。現場でそんな関係性をつくることの困難さを思いつつそう振り返るのです。



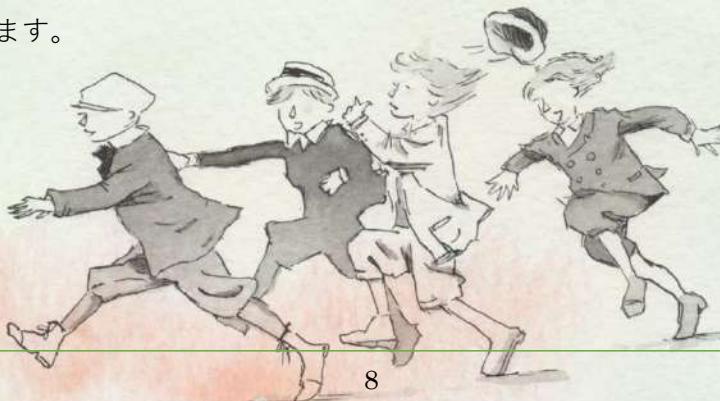
アクティブ・ラーニングのすすめ

今多くの先生方が「アクティブ・ラーニング」に関心を持っておられ、各地で研修会や学習会が開かれています。従来の授業のやり方だけではダメだと思っている方がたくさんいることの現れだと思います。

子どもたちが「アクティブな状態に置かれ」、リラックスできる環境の中で、一人ひとりの発言が尊重され、対話が交わされ、学びの責任者として尊重され、自分の問い合わせについて探る時間が保障される、そんな中で学ぶことが出来たら、子どもたちは（大人たちも）幸せだろうと心から思います。だから、アクティブ・ラーニングを勧めます。

誰かが整えたものを形だけやってみるのではなく、しないといけないからただするのではなく、苦手とはね除けるのではなく、なぜ今これに取り組むのか、取り組むことで何を目指すのかと、その本質を問い合わせながら、職員みんなで取り組んでいけたらと思います。分からぬこと、不安なこと、嫌なこと、期待すること等々をじっくり出し合って、共通了解をもって取り組んでいけたならば、そこに、子どもが主体として学ぶ環境が生まれてくるのではないかと思います。子ども自身の学びを目指してみんなで学び挑戦していく、このこと自体が教師のアクティブ・ラーニングです。教師自身が主体的に協同的に学ぶ姿勢を持つことが、アクティブ・ラーニングの成功に通じていくのだと思います。

最初は、アクティブに「させる」ことからのスタートかもしれません。ゲームやディスカッションを取り入れたり、サークル対話をしてみたり、一斉授業の枠をはずしてみたり、選んで実行する機会をつくったり、お膳立てせず子どもに任せることをしてみたり、できることは色々あります。すぐに成果は見えないかもしれません。でも、その本質を問い合わせながらアクティブな学びを進める努力は、個々の子どもの可能性に気づくことに通じるはずです。そしてそれをさらに伸ばすことを考えながら、子どもたちをアクティブな状態に置けた時、きっと子どもたち自らが、自分の学びを見つけ出していくのだと思います。



『リヒテルズ直子氏×苦野一徳氏と イチから考える公教育』



2017年1月22日（日）、株式会社内田洋行様の新川本社をお貸しいただき、『リヒテルズ直子氏×苦野一徳氏とイチから考える公教育』を開催しました。

溢れる知見と熱い思いで止まらなくなるほどの、お二人の対談。原理から実践へと進もうとする私たちに勇気をくれた情報提供。約120名の参加者と共に学ぶ、熱気あふれる会となりました。

お越しいただけなかった方にもぜひ内容をお届けしたく、レポートを作成しました。

《概要》

1. 対談：「公教育」とは何か

リヒテルズ直子氏、苦野一徳氏（聞き手 中川綾）

2. 情報提供：「公教育」での実践と経験について

公立小学校教諭・青山光一氏、きのくに子どもの村学園卒業生・古賀要花氏

3. トークセッション：「公教育」のこれからに期待すること

リヒテルズ直子氏、苦野一徳氏、青山光一氏、古賀要花氏（進行 中川綾）

対談

中川さん：「公教育をイチから考えよう」で一番皆さんにお伝えしたかったことはなんですか？

リヒテルズさん：グローバル化が既成事実となった今、世界中で、「公教育」の本来の意味が問い合わせられているという問題意識がありました。そんな中で、公教育の目的に関する欧米の先進的な議論を見てみると、共通してあげられるのが、「自分を知ること、他者を尊重すること、世界のシステムを学ぶこと」です。イエナプラン教育の創始者であるペーター・センは、世界中の教育者たちが、今やっと目を向け始めた公教育の課題に、すでに90年前に気づいて取り組んでいたし、オランダでは、イエナプランが50年も前から公教育に影響を与え始めていたというのは、大変注目すべきことです。これらを元に、ぜひ、公教育の本質とは何かを問う議論をしてみたかったのです。

苫野さん：これまで、1人の教師に負担がかかってきました。「自分1人の力で変われ」と言っているのではなく、日本でも、もっと行政が「管理よりサポート」をすべきだと考えています。例えば、オランダでは教員1人につき、年間13万円ほどの研修費がつくそうです。教育は、相互依存的アーキテクチャ。例えばアクティブ・ラーニング導入となれば、入試や採用など、全てを変えなければならない。だから、なかなか変わらない。まずビジョンが必要で、私は教育学者としてそこを担いたい。同じように、それぞれが強みを生かしながら役割を担うべきだと思うのです。世界には良い実践の蓄積もある。それらをどんなシステムに乗せるか、実装の時期に来ている。

この本を出して、行政から研修などの依頼をより多く受けるようになったが、必ず“やり方”的な話になり、違和感があります。「何のための方法なのか」「何のための学校なのか」という問いを飛ばしてしまっている。方法のパッチワークではなく、一から、根っこから考えて、共通理解をつくることが大切だと思います。

中川さん：wh yから始めることが、できるはずですよね。では、共通のビジョンをつくるために、何ができるでしょうか。

リヒテルズさん：「やり方」が先行し、原理が看過されやすいというのは、私も同感です。確かにそうなのですが、他方で、イエナプラン教育は、いくつかの特徴的な



形式を踏まえてはいますが、オープンモデルなので試行錯誤が必要です。ですから実践しながら原理に近づいていくという方向もありだと感じます。原理に基づく実践を続ける上で重要なのは、教職員が共同体として常に忌憚のない意見交換を続けられているかという点です。歴史や由緒ある学校ですら、意外なほど学校共同体がないケースが多いと感じています。イエナプラン教育の「遊び」「催し」「サークル対話」などは、いわゆる勉強とは異なり、様々なレイヤーでの共同体としての生活の共有経験です。継続的な議論や共感の場は、教職員チームにも不可欠です。

苦野さん：実践から立ち戻れるような原理をしっかりと言葉にしていくことと、目の前の子どもの姿から出発することの、2本の柱を合わせていくことが大切です。学校教育の中での自由と自由の相互承認は、この20～30年、見失われてきた。「教育は何のためにあるのか」、それは「全ての子どもたちが自由に生きられる力を育むこと、そして相互承認の感度を育むこと」にあると思います。このことに納得できたら、いつもここに立ち返れるはずで、これを具体化する手法が、現代においては「学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合」であるとこの本には書きました。

中川さん：“やり方”と“あり方”はどちらか、ではない。原理を言葉にすることで戻ってくることができるので、言語化は大事ですよね。また、「感度」というと、どう育んだら良いのか、と迷うこともあって、まずやってみる、ということも次への一步になることもありますよね。

リヒテルズさん：個人主義が進んだオランダの人たちは、自分の意見を人前で恐れずにはっきりと言います。「自分」の意見が言えるのは、他者と共に互いの違いを受け入れ尊重し合うという前提があるからです。日本人はとかく「批判すること」「意見の違う他者を受け入れること」が苦手ですが、オランダ人だって初めからできているわけではありません。学校がそうした態度を養い育てるのです。イエナプラン教育で毎日繰り返されるサークル対話はその練習の場です。だから、決して、名指しで発言を強制しません。子どもの内側から湧き上がる声を待つこと、それこそ教育の本質です。また、子どもに求めることは、教師自身ができていなければなりません。まず、教員同士がお互いに相互承認できているかを振り返ってみることが大切だと思います。

苦野さん：教員採用試験の集団討論で、「協調性を見る」という話がある。でも自由の相互承認は、協調的であれというのとは違います。ニーチェに、「愛せない場合は通り過ぎよ」という言葉がありますが、相手が気に入らないからといって攻撃するのではなく、とりあえず存在は承認する。それが相互承認の最低レベルです。必ずしも協調する必要はない。

その上で、育むべき相互承認の感度にはいくつかの段階があります。第一に自己承認、第二に他者承認、第三に他者からの承認で、中でも自己承認が大事です。私は、「自己肯定感」という言い方はちょっと強すぎるかなと考えています。「自分、オッケー」くらいの感じでいいんじゃないかなと。そしてこれは、特に親和的な他者からの承認の経験によって育まれるものです。

中川さん：「公教育をイチから考えよう」のP.148に、イエナプラン教育の「コア・クオリティ」が紹介されています。そこには、まず、子どもの「自分自身との関係」の重要さが挙げられ、続いて「他者との関係」、「世界との関係」と続いている。日本の学習指導要領では、逆に、社会との関係から始まり、自分自身が最後に位置付けられている記述があることが象徴的だなと。我慢や強調を美德とする国民性を越えるには葛藤があるが、西洋人だって苦しいときはある。日本人だってできるはずだと思うんです。

行政の“サポート”とは、何であるべきと考えますか。

リヒテルズさん：教員が子ども一人ひとりを尊重できるかは、教員自身が国や教育委員会から信頼されているかどうかにかかっています。その時に初めて、子ども達は、「人間」としての教員に育まれるようになるからです。国や自治体は、教員が自分で判断して行動できるように、ある程度の自由裁量を認めるべきだし、学校に対しても、教員同士が共同で責任を持って学校の運営に当たれる体制を保証することが大切だと思います。

苦野さん：文部科学省は、制度的にあまり現場を縛っていないです。それなのに、慣習が現場の自由を許さない現実がある。管理や監督の役割も重要ですが、行政ができるだけ、支援にまわるべきだと思います。教員養成や研修もガチガチで、主体的・能動的に学ぶ余地があまりありません。行政は、子どもや教員一人ひとりの主体性に委ね、「ああ、こんなふうに育つのか」という実感をもとに、手綱の緩め方をつかんでいくべきではないでしょうか。

中川さん：どの学校でも「自立的・主体的な学び」を掲げているけれど、それは先生方と行政の関係でもやれていることを求めているともいって、言っていることと一致していないですね。

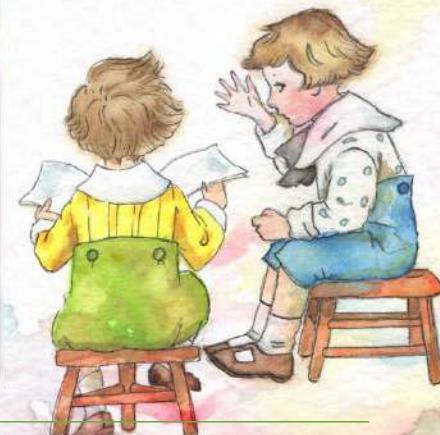
最後に、本のP.44にある、お二人の考え方と思いがよく表れている箇所を読み上げたいと思います『オランダの学校教育が素晴らしいからといって、そこで行われているものの形式だけを切り取って日本に取り入れることは得策ではありません。ある制度や政策を、それが生まれてきた歴史的背景や文化・社会的な文脈から切り離して、形だけほかの場所に取り込もうとして失敗する例は少なくないからです。』。

リヒテルズさん：日本は、思いやりのある温かい人間関係の社会です。でも反面、集団の同調圧力も強い社会です。少し異なる意見や立場でもはっきり言つていい方がいい。それが長い意味で社会に希望を生みます！

情報提供 古賀要花さん

きのくに子どもの村学園の卒業生である古賀さんが、きのくにで学んだことと、大学受験を通して感じたことを話してくださいました。

古賀さんは、公立の小学校に通っていた時期もあり、とても学校を楽しんでいたのですが、お母様の勧めできのくにを見学して、きのくにの方が楽しそうだと感じて転校をしました。その楽しさの違いを、「与えてもらう楽しさか、築く楽しさか、だと思う」と語ります。高校3年生まできのくにで学びました。中学生の時、公民の授業でオランダの教育に関する映像を観たことをきっかけに、リヒテルズ直子さんの本を全て読み、ついには高校時代にオランダに行き学校を見学しました。オランダの学校は、きのくにのように居心地が良かっただけでなく、国全体の制度としてこのような学校を選択できることや、全て無償であることに感動し、日本の教育制度改革に関わりたいと考え、大学進学についても志望校を変更したそうです。大学受験では、同年代の「普通の学校」に通っていた人たちが、学校の授業とは別にプロジェクトを実施している姿を見て、勉強もできる上にこんな活動をしている人たちがいるのであれば、「自分がきのくにに通っていた意義とは何なのだろうか」「もし普通の学校に通っていたらこんなに受験で苦しまずに済んだのではないか」ときのくにを恨んだこともあったと話してくれました。しかし、プロジェクトを実施している人たちは、受験のためだけに実施していることも見えてきて、予備校の講師に「鏡の前で面接の練習をしろ」と指導されて、やろうとしても言葉が出なくなってしまった時に、お母様に「もうきのくにを責めるのはやめよう。きのくにの子は、そのままの自分で話をするから受かるんじゃない?」と言われて気持ちが切り替わったそうです。そしてめでたく、教育政策に関して学ぶことのできる大学に合格しました。



「私たちのようなきのくに卒業生が、キラキラして羽ばたくことが大事なんだと思う」と堂々と話す古賀さんの姿は、私たちに「自らの学びを楽しんできた人たちがどのように育つか」をはっきりと伝えてくれた気がしています。「きのくにの自由は、好き勝手にする自由ではなく、それぞれの多様性を認め合いそれぞれを尊重し合い、それでいてそれが最大限に伸びる自由なのです。」この言葉と古賀さんの姿そのものが完全に一致するプレゼンテーションでした。

※「学校法人きのくに子どもの村学園」

<http://www.kinokuni.ac.jp/nc/html/htdocs/index.php>

「学校法人きのくに子どもの村学園」は、1992年、和歌山県橋本市でスタートしました。戦後はじめて学校法人として認可された自由な学校です。

現在は、きのくに子どもの村小中学校、かつやま子どもの村小中学校（福井県）、南アルプス子どもの村小中学校（山梨県）、北九州子どもの村小中学校（福岡県）、きのくに国際高等専修学校（和歌山県）があり、約600人の子どもたちが寮生活を送りながら学んでいます。
(きのくに子どもの村学園HPより抜粋)

情報提供 青山光一さん

公立小学校の教諭である青山さんは、校内研究で研究中のワールドオリエンテーションに関する報告をしてくださいました。

「公立学校を改革していくための第一歩としての研究」というお話からスタートしました。まず、学校教育の現状を客観視した上で問題意識を共有するために、多くの本を教員同士で読み合い、語り合う場を持ったそうです。その中で、「どんな学校にしたいか」ということや、校内研究でワールドオリエンテーションについて取り組みたい、などの意見が出てきて、その結果、平成28年度から3年間の研究テーマとして、生活科・総合的な学習の時間を活用してのワールドオリエンテーションを実施することが決定されました。この研究には弊会の中川も関わせていただいております。まずは、全教員からワールドオリエンテーションに対する疑問や質問を出し、日本の学習指導要領に書かれていることとオランダの学習指導要領に書かれていることを比べて共通事項を確認し、7つのテーマを具体化して「私たちの小学校のワールドオリエンテーション事例集」をつくりました。その後、どのテーマで実践するかを決定し、第1回目は、「旅名人」をテーマとして、下学年（1・2・3年生）は「秋の校外学習の計画を立てる」、上學年（4・5・6年生）は「国内旅行の計画を立てる」で実践しました。

実際にワールドオリエンテーションを実践するにあたって、毎週火曜日の5・6時間目を全校一斉のワールドオリエンテーションの時間に変更したそうです。その際、1年生は毎日5時間授業のところを火曜日のみ6時間授業となってしまうことについて、校長先生が「いいんじゃないかな」と決断してくださったというお話もありました。現在、実践を重ねたものについて、記録をきちんと保管して実践ごとにアップデートしていくようにしているそうで、このことからも、「研究が終わってからも実践を続けてほしい」という強い思いが伝わってきました。現在のところの研究の成果としては、「教員同士が主体的に語り合う時間が圧倒的に増えた」こと、「異学年による交流が活発になった」こと、「年齢が上の学年のリーダーシップが高まったこと」などが挙げられるそうです。課題としては、「年齢が下の学年の参加度をどう上げていくか」や、「教員の関わり方をどうするか」、「テーマ毎のねらいの共有不足」などを感じているため、これから研究実践で深めていけるようにするとおっしゃっていました。公立学校での研究に、参加者の方々もかなり「できるんだ！」と心が動かされていたようでした。今後も報告を楽しみにしたいと思います。



トークセッション

中川さん：古賀さんと青山さんの発表について感想をお聞かせください。

古野さん：昨年末きのくに子どもの村学園に行き、プロジェクトを中心に学びが進んでいる様子を見て、「ここにひとつの究極があるな」と思いました。古賀さんやきのくにの生徒は、借り物じゃない自分の言葉や、底力のようなものを持っている。それはあの環境で育まれるのだな、と感じました。青山さんの発表では、「これいいな」というモデルを見せてもらえて希望をもらった。ぜひ何らかの形で関わらせていただけたら嬉しいです。

リヒテルズさん：私は、以前から、教育を変えるには、草の根の運動と、教育行政という管理者側の意識変革の両方が必要だと言い続けてきました。古賀さんは、自分の受けた教育を客観的に見ており、オランダの教育が全体として個々の子どもの尊重の上に立っていることに気づいて「政治に関わって教育を変えたい」と思った。そこに心を打たれました。青山先生の発表では、今の体制でも、公立校でこんなに多くのことができるということを証明していただきました。先生たちが、TeacherからLearnerになった。青山先生たちの実践は、国際水準の最先端をいっていると思います。

青山さん：3年前にリヒテルズさんと初めてお会いし、日本の学校でやるのは大変だろうと言われたのですが、期待されていると感じました。学習指導要領はワールドオリエンテーションとつながる内容が多く、本当の意味で総合学習を突き詰めていくと、ワールドオリエンテーションに近づくと思います。



リヒテルズさん：ワールドオリエンテーションは、イエナプラン教育がオランダに来た後で生まれました。生きた世界の生きた事象を題材にして、自分と他者がそれぞれの得意を持ち寄って共同で問題解決に取り組む。イエナプラン教育のハートです。

中川さん：青山さんの小学校では戦略的に学習指導要領の話をしました。同じことを目指しているのだということが分かれば安心して始められます。

古賀さん：今のアクティブ・ラーニングを見ていると、「それってアクティブ・ラーニングじゃないよね」ってことが多いんです。こちらからするとお遊びっていうか・・・。それで効果が出ないって言われても、「そりゃ出ないでしょ」って思う。きのくにでは、テーマ自体が子どもから勝手に出てくる。私のような教育を受けてきた人と、通常の教育を受けてきた人が一緒になった時に、ではこれから何ができるのか、ということが始まると思います。

中川さん：制度を変えることと
現場を変えていくことは両方あってこそ。
どうしたらそこがつながるのでしょうか。

苦野さん：いろんな立場の人が
腹を割って話し合う場を設けることが必要なのではないでしょうか。

リヒテルズさん：日本では今、教育行政の権限も、中央から
地方に移譲されつつあります。もちろん財政的な理由によるものでしょうが、それをチャンスと受け止めることも可能なのではないでしょうか。日本の多様性は「地域性」にあります。地方ごとの特徴ある教育が、全国に多様な実践を生み、より良いものを創造するきっかけになると思います。

青山さん：学校でも同じことが起こっていて、子どもに任せていくことが不安でレールを敷いてしまう先生と、自主性を伸ばそうとする先生が対立することがよく起こるのですが、根本にあるのは”子どものより良い成長”という共通の願いなんですね。



古賀さん：今は自分がキラキラして、発信していくことで、教育の成果を証明していくたい。任せることは不安だと思いますが、心から信頼されると悪いことなんてしない。もっと信頼し合うことが大切だと思います。

苦野さん：「信念と信念の対立」にどっちが正しいかはありません。しかし、信念とは欲望の別名で、底にある欲望は何？と考えた時に、そこが結構共通していることがあります。お互いの信念を認め合いながら、では何ができるのかを一緒に考えて第3のステップに進むことができます。

中川さん：教育現場から見て、行政にどんなサポートがあればいいと思いますか。

青山さん：2つあって、1つは教員に自由裁量を委ねて欲しいということ。2つ目は、ワールドオリエンテーションの教材作りはとても手間がかかるので、行政には教材や教員が求めている情報を提供するようなサポートをしてほしいです。

リヒテルズさん：自由裁量権の重要性は、それによって多様な考え方や実践が生まれ、お互いに自分を見直すきっかけとなり、全体としてバランスのある社会が生まれ、大きなリスクを回避することができることにあります。自由裁量権を獲得するには、まず、信念を持って「取り組む」こと、また、その成果をエビデンスとして示すことです。そうすれば、制度に限界があるときに改革を求めていくことができます。エビデンスは、いわゆる学力も大切ですが、自らの教育のビジョンに照らして示していく。このような教育をしたらこういうことができるようになった」というふうに。これは、日頃の自らの実践を原理的なビジョンに照らして振り返る上でも必要だと思います。

青山さん：今は、ビジョンよりも手法がちゃんと行われているかのチェックが入るんですね。

苦野さん：習熟度別の弊害のエビデンスがアメリカなどで多く出てきました。一斉授業がベースだから習熟度別が行われるんですよね。「個別化・協同化・プロジェクト化の融合」が進めば、つまり学びのパラダイムが変われば、習熟度別の意味がなくなるんです。

リヒテルズさん：習熟度別は、画一一斉授業の穴を埋める対処療法に過ぎません。根本的な解決をするには、入学時から差が出ないように一人ひとりに最もふさわしいやり方で確実に発達を保障することです。

今回のフォーラムはリヒテルズさんと苦野さんのどんどん深まっていく対話に加えて、現場からの報告が加わり、とても充実した時間となりました。またこのような、考え方と現場を繋ぐ場をつくりたいと思いますので、今後ともよろしくお願ひいたします。

支部活動報告

埼玉支部

埼玉支部では、2016年11月23日、2017年1月8日、2月12日に勉強会を開催しました（いずれも富士見市の「ピアザふじみ」にて）。

勉強会のきっかけは、昨年協会が主催したイエナプラン教育全国大会でした。その地域別交流会で、埼玉県民が数名集まった際「埼玉でも勉強会を！」という声が上がり、多数の方のサポートがあって、やっとやっと！埼玉でも勉強会が発足しました。

第1回勉強会では、「今後どのように勉強会を進めていくか」集まったメンバーで意見を交換しました。「ブロックアワーについてもっと知りたい人」「ワールドオリエンテーションについてもっと知りたい人」と、参加メンバーの中で興味の対象がなんなく分かれ、それぞれが学びたいことに基づいて分科会形式で深く学んでいこうという意見が出る一方で、「こういった実践がどのような考えに基づいて行われているのか？」それを深く考える事が大事であり、「あり方」を深める対話をしたい、その延長線上で実践の話もしていこうという意見も出了しました。結果、埼玉支部勉強会の方針は後者となり、【20の原則】を読み進めていくことになりました。オランダ・イエナプラン教育のDVDや過去のニュースレターも参考に、教育のあり方について考え始めたところです。

第2回勉強会から原則1を読み始め、【20の原則解題】もヒントに対話を深めたのですが、原則1を読むだけであっという間に1時間半が経過。他者との対話を通して新たな発見があったり、充実した時間が流れました。今後も定期的に続けていく予定ですので、埼玉近隣の皆様どうぞご参加ください！

（報告：田村悠子）



東京（世田谷）支部

2016年9月3日、10月2日、11月13日、12月18日、2017年2月5日、定期開催している勉強会『20の原則を読む』を行いました。イエナプラン教育のDVDを見て参加者同士が対話をしながら、様々な立場や角度から「教育」について学び合っています。教員だけでなく、保護者、学生、そしてオランダからイエナプラン教育を学ぶために留学している山地さんもスカイプで参加することも。多様な方が集まる場となっていますので、ぜひ皆さんご都合が合う機会にご参加ください。

（報告：中川綾）

長野（南信）支部

2016年9月3日、伊那市ますみが丘、10月29日、伊那市ワイルドツリーにて、イエナカフェ@伊那谷を開催しました。毎回少しずつDVDを観て「20の原則」を読み、感じたことや疑問などを話し合っています。10月29日は、参加メンバーの企画で、聾啞者、手話通訳、筆談通訳が参加するサークル対話をしました。

2月11日に駒ヶ根市内の小学校で先生を対象としたDVD鑑賞会を行いました。

（報告：幕内那菜）

愛知（名古屋）支部

2017年1月28日、『リヒテルズ直子氏講演会 オランダのイエナプラン教育とヨーロッパの教育事情』を【ウインクあいち】にて開催しました。

今回は、名古屋では初となるリヒテルズ直子氏による講演会です。参加者は65名。とても良い雰囲気での開催となりました。会の前半は、「ヨーロッパの公教育は今 - - オランダの事情を中心に - - 」というテーマで約1時間にわたり講義形式で行われ、後半は約2時間「オランダ・イエナプラン教育とアクティブ・ラーニング」というテーマにそってアクティビティと意見交換をしながら進めて頂きました。参加者は10名ずつのサークルをつくり、お互いの顔を見ながら話し合いました。イエナプラン教育とはどんな教育なのか。アクティブ・ラーニングとは何なのか。またアクティブ・ラーニングは何のために行うのか。イエナプラン教育とアクティブ・ラーニングの関係とは。参加者一人ひとりが本質を考え、そして他の参加者との意見交換を繰り返すことでの多様な考え

方に触れて刺激し合っていました。会の最後は、リヒテルズ直子氏に向け参加者からの熱心な質問がありました。そして、その後一人ひとりでの振り返りの時間が設けられ閉会しました。参加者からのアンケートでは、とても満足度の高い講演会だったことが読みとれました。多くの参加者が刺激を受け、今後の教育活動に生かしていきたいと考えているようでした。

(報告：若杉逸平)



関西（大阪）支部

2016年9月17日にイエナカフェ@大阪 #2 「20の原則を読む会」（co-arc）、11月3日、12月3日には認定NPO法人箕面こどもの森学園との共催でDVD『明日の学校に向かって』鑑賞会@大阪・箕面市を行いました。

2017年1月29日には「自尊心と異なる他者との共生に基づくグローバル時代の市民の育て方」をテーマに、リヒテルズ直子氏による講演会とワークショップ開催しました。この会には、総勢50名の方にお集まり頂き、会場となった箕面こどもの森学園のホールは超満員となりました。会は終始イエナプラン教育の形式で進んでいきました。

オランダのみならず各国の最新の教育事情を紹介して頂いた後、4つのグループに分かれてお互いの紹介といいくつかの遊び。続いて、ピースフルスクールの授業で行われている「褒め言葉・アドバイス・けなし言葉」についてグループで考え合うワークをしました。

そして、メインとなったのは全員参加によるディベート。「スポーツのクラブ活動は、学校の課外活動として行うべきだ」という主張について、肯定・反対それぞれの立場から主張しました。「根拠のある主張」をし、批判的に考え合うことを通して解決策が浮かび上がってくる。これが成熟した市民社会の意思決定であり、このようなことができる人が、これから時代に求められるグローバル時代の地球市民なのだと語られました。

同会場での懇親会では、前日の名古屋に引き続いてリヒテルズ直子さんの誕生日をお祝いし、最後はリヒテルズ直子さんの「皆さん、賢くなりましょう。」という印象的な一言で締め括られました。市民になるとは賢くなることで、そのためには練習が必要。でも、私たちなら、きっとまだまだ賢くなれるはず。そんな希望を抱くことのできる熱気あふれる場となりました。

※ 3月12日DVD『明日の学校に向かって』鑑賞会@大阪・枚方市を予定しています。
関西近郊の皆様、ぜひご参加ください。

(報告:濱大輔)



福岡支部

福岡支部は、昨年名古屋で開かれたイエナプラン教育全国大会の影響を受けて、ついに、月に1回の勉強会を実現。2016年9月22日、10月29日、11月26日、2017年1月28日に行いました。「20の原則を読む会」を行っています。毎回、参加者同士で意見交流する中で、いろんな気づきがあり、本当に楽しんでいます。2月以降も続けて行きます。

12月は、26日に吉田和充さんをゲストにお迎えして、トークイベントを行いました。年末の忙しい中、50人を越える参加者が集まって下さいました。

吉田さんは、昨年4月にご家族（奥様、2人の息子さん）と共に、子育てのためにオランダに移住した方です。お正月に福岡に帰省されたのを機会に、イエナカフェin福岡に来ていただきました。前日に帰国されたばかりで、お疲れだったと思いますが、

- ・なぜオランダでの子育てを決心したのか。
- ・オランダの学校の実際の様子

・オランダでの子育てを通して見えてくること

などを中心に約2時間、いろいろな角度からお話しをして下さいました。オランダ移住のきっかけは、なんと一昨年11月の協会主催オランダ・イエナプラン教育専門家招聘セミナーに参加したことだそうです。元々海外への移住を考えていたそうですが、イエナプラン教育に感銘を受け、移住先をオランダに決定したとのことでした。セミナーからわずか1年の間にこのような展開が？？？と、その行動力に圧倒されてしまいます。ですが、「子どもの成長は待ったなしだから」という吉田さんの父親としての言葉に、日本の教育環境を良くしたいと願う会場の多くの方が、深く頷いていらっしゃいました。

(報告：久保礼子)



各支部のご案内

- | | |
|------------|--------------------------------|
| ・北海道（帯広）支部 | hokkaido-obh@japanjenaplan.org |
| ・埼玉 支部 | saitama@japanjenaplan.org |
| ・千葉（浦安）支部 | chiba@japanjenaplan.org |
| ・東京（江東）支部 | chiba@japanjenaplan.org |
| ・東京（大田）支部 | chiba@japanjenaplan.org |
| ・東京（世田谷）支部 | info@japanjenaplan.org |
| ・長野（南信）支部 | nagano@japanjenaplan.org |
| ・愛知（名古屋）支部 | nagoya@japanjenaplan.org |
| ・関西（大阪）支部 | kansai@japanjenaplan.org |
| ・福岡 支部 | fukuoka@japanjenaplan.org |

千葉（浦安）支部、東京（江東）支部、東京（大田）
支部は共同運営しています。